

少し前になりますが、8月中旬に1冊の書籍が届きました。早速開けてみると、新井宏先生の『理系の視点からみた「考古学」の論争点』という新著でした。著者の新井先生からわざわざ送っていただいたことに感激し、さらに先生の優れた研究がこのように本としてまとまったことに感動しました。

新井先生の斬新なこれまでの研究の一端については、このブログでも紹介して参りました。これらの研究をまとめた今回の本では、

第一章 三角縁神獣鏡は魏鏡か

第二章 炭素十四法によって弥生年代は遡上するか

第三章 古墳の築造にどんな尺度が使われたか

第四章 金属考古学上の緒論争

という構成になっています。いずれもが現在の考古学界では焦眉の課題であり、避けて通れない重要な問題です。

ここでは、これまで私自身も述べてきた関係から第一章の「三角縁神獣鏡は魏鏡か」に絞って、考えてみたいと思います。

そのためにまず三角縁神獣鏡についてのこれまでの研究史を見ておきたいと思います。

### 三角縁神獣鏡の研究史

三角縁神獣鏡を魏の鏡であると初めて認定したのは、絵画でも有名な富岡鉄斎の息子で京都大学の講師をしていた富岡謙蔵です。大正9年（1920年）のことです。

その後、富岡のこの認定は同じ京都大学の梅原末治に受け継がれました。

そして決定的になったのは戦後の日本考古学の全般を主導した京都大学の小林行雄によって、「景初3年」「正始元年」のある紀年鏡を根拠にして、三角縁神獣鏡が魏の鏡であるとの論文がでたことです。さらに小林は、京都府の椿井大塚山古墳から大量に出土した三角縁神獣鏡の詳細な分析を行い、日本各地の古墳から出土した三角縁神獣鏡一面一面を検討して、椿井大塚山鏡との分有関係を明らかにし、三角縁神獣鏡こそが卑弥呼が魏から下賜された鏡に他ならず、大和にある邪馬台国から各地の有力者に分け与えたものだとしました。

精緻な分析と手堅い論証に裏付けられた小林の説は、その後の考古学界の基本的な枠組みとなり今日まで大半の考古学研究者の共通認識、常識として位置づけられることになりました。

### 三角縁神獣鏡魏鏡説への批判

他方、覆すことが難しいと考えられた小林行雄の説にいち早く反論したのは、内藤晃でした。内藤はまず、小林の言う「伝世鏡論」について、その主たる論拠となる「手磨れ」について疑義を出すとともに、小林の言う三角縁神獣鏡が特別の扱いを受けているとする説に出土事実を挙げて、反論しました。さらに九州では伝世せずに畿内では伝世したとする小林の見解に対して、そのようになった具体的説明がなされていないことに論及しました。

つまり暗に小林の見解がご都合主義的なダブルスタンダードであることを看破し、小林の論理の飛躍を鋭く追求しました。さらに漢中期の鏡が伝世したとする点について、「実証すべき何等の事実」もないという重要な問題提起を行いました。この内藤の提起は、実は今日的意義を持っていることが今回の新井先生の分析によって明らかにされたことは重要だと思います。

今日ほとんどふれられないことがない内藤晃の説は、小林行雄説に真っ先に批判した点で、さらに理論的系統的に批判した点でも高く評価されるものです。

その後森浩一氏は、この内藤説や原田大六説を援用して、小林の「伝世鏡」説に疑問を呈し、「伝世鏡」論を否定しました。

森浩一氏はさらにその後他の点についても、疑義を出しました。三角縁神獣鏡非魏鏡説は、奥野正男氏（中国鏡にはない笠松型文様）、古田武彦氏、森博達氏、小山田宏氏などから相継いで出されました。

今回の著書では、これらの非魏鏡説の論点がまとめられていますので、それを以下に紹介したいと思います。（以下引用）

#### 三角縁神獣鏡魏鏡説への批判

- ①なぜ中国から1枚も出土しないのか
- ②なぜ下賜鏡なのに銘文が韻を踏んでいないのか（森博達氏）
- ③なぜ中国鏡にない文様があるのか（奥野正男氏）
- ④なぜ民間信仰を弾圧した魏が仏獣鏡を下賜したのか（小山田宏氏）
- ⑤なぜ下賜鏡に、仕上げ加工が行われていないのか
- ⑥なぜ棺外に副葬されるものが多いのか
- ⑦なぜ寸法が中国鏡の2倍もあるのか
- ⑧なぜ下賜された百枚をはるかに超えて発見されるか

等々である。このように、証明責任を相手側に投げかけて、議論を進めている場合が多いのが国産鏡説の特徴です。（引用終わり）

#### 三角縁神獣鏡非魏鏡説の問題点

三角縁神獣鏡国産説の論拠は上に引用した通りですが、各項について検討してみたいと思います。

①は最後にふれるとして、まず②から見ていきたいと思います。

きちっと数えた訳ではありませんが、三角縁神獣鏡で銘文をもつ鏡は限られた鏡しかありません。ですからごく一部の鏡については②の論点は成り立ちますが、三角縁神獣鏡すべてに言えることではないという反論が成立する余地があります。

③についても、いわゆる笠松型文様を持つ鏡は②の銘文を持つ鏡よりはるかに多いですが、すべての鏡にあるわけではなく、これも普遍的に言えることではありません。

④についても、②・③と同じように仏獣鏡そのものが限定された数で、すべてに普遍化して言えることではありません。

⑤と⑥についても、すべての三角縁神獣鏡が仕上げ加工がされていないということではなく、鋳バリが取り除かず、研磨されていないものが結構存在するという事です。また棺内に副葬されているものもありますが、棺外にあるものもあるということです。ですからこの2点も三角縁神獣鏡全般に言えることではありません。

⑦については、中国の神獣鏡類は確かに小型で、三角縁神獣鏡のような大型のものはありません。大半の中国鏡は小型ですが、神獣鏡ではありませんが中には大型鏡もありますので、⑦の指摘だけでは十分ではありません。

⑧は、舶載鏡とされているものがこれまでのところ何面あるか調べていませんが、百面は軽く越えていと思います。だからといって、それが魏からもらった鏡なら百面を越えるはずがないとは言い切れません。

なぜならものはいよいよ魏からもらった非常に重要な鏡で、倭国にとっては記念すべきものだから、引き続きもらったものでも、何とでも言えるからです。

このことと関連して、現在確認されている三角縁神獣鏡のいわゆる舶載鏡と仿製鏡の両方を併せますと、数百面になります。

千数百年の時を経て現在まで残っているというのは、本当に偶然に偶然が重なった奇跡的なことだからです。このことは1点の金印が見つかるということは、ほとんど奇跡に近いということとも関係します。

話を三角縁神獣鏡にもどして、現在残っている三角縁神獣鏡は数百面ですから、実際古墳時代に流通していた三角縁神獣鏡はその何倍かあったということになります。そうしますと低く見積もっても、それが2倍としますと千面ぐらい、3倍としますと二千面ぐらいの三角縁神獣鏡があったということになります。

ということは、それだけ大量に流通していた三角縁神獣鏡であれば、日本から中国や朝鮮半島にも持っていったって何の不思議もありません。

今後中国や朝鮮半島での発掘調査が進めば、見つかる可能性がかなりあります。

ということで、①の「なぜ中国から1枚も出土しないのか」という非魏鏡説の論拠は、そのような可能性をも含んでいないので、極めて一面的であると言わざるをえません。

非魏鏡説の論拠を簡単にみてきましたが、各論点が普遍的に言えることではなく一部にしかな該当しないという側面があるということです。ただ、これらの論点を総合的に見れば、傍証的として、もう少しきつい表現をすれば、心証的に非魏鏡説になるというものです。ですから考古学界の主流と言いますか、大半の流れとしていまだに三角縁神獣鏡を魏鏡とするのが定説になっています。(つづく)

## 鉛同位体分析の研究

このように魏鏡説と非魏鏡説が併存するという状況の中で、鏡の鉛同位体の分析とそのデータが何人かの研究者によって公表されました。中でも、1980年代以降東京国立文化財研究所の精度の高い質量分析器を使った馬淵久夫氏と平尾良光氏は膨大な分析値データを提供するとともに、鉛同位体比を表示した基準図を作りました（グラフ参照）。そこには縦軸に  $Pb208/Pb206$ 、横軸に  $Pb207/Pb206$  をとり、前漢鏡などの華北の鉛（領域A）、後漢・三国鏡などの華南の鉛（領域B）、日本産の鉛（領域C）、多鈕細文鏡など朝鮮半島の鉛（直線D）と、各地の鉛の分布領域が視覚的にわかるように示されています。

そして馬淵氏らはこの基準図に、問題の三角縁神獣鏡の鉛同位体比の分析値を落としてみました。その結果、いわゆる舶載の三角縁神獣鏡は領域 B に属することを明らかにしました。領域 B、つまり後漢・三国鏡など華南の鉛で舶載の三角縁神獣鏡が作られたことが明らかになったということです。これによって、舶載の三角縁神獣鏡は魏の鏡であるということに決着がついたかのように見えました。馬淵氏ら研究に対する批判ところが馬淵氏らによる鉛同位体の研究結果に対して、三宝伸銅工業の久野雄一郎氏からは次のような批判が出されました。すなわち、日本の鉛鉱床で最も大きい岐阜県の神岡鉱山のデータが加味されていないというデータ分析を行う上での前提そのものが危ういという点、さらに4種類ある鉛同位体を分析するのであれば、本来なら四次元の位相空間の1点として表示すべきだが、それでは視覚的に表現できないという難点があるため、せめて三次元表示をして、できるだけ分析値本来の姿を生かした表示にして、考察する必要があるとの分析の前提と分析手法への疑問でした。また考古学者の故堅田直先生は、久野雄一郎氏と同じ視点に立って、三種の同位体比をもとに多変量解析法を使って、京都府の椿井大塚山古墳出土の舶載三角縁神獣鏡を馬淵氏らのデータを使って分析し直しました。その結果、少なくとも何面かの三角縁神獣鏡が馬淵氏らの報告とは異なり、神岡の鉛を使っている可能性が高いことが明らかとなり、これまでの報告の再考を促しました。このように非常に貴重な提言がなされた訳ですが、馬淵氏らが出した研究、特に鉛同位体による基準図はその後使われたり、引用されるという状況が続いていました。

### 新たな研究

2000年になって、新井宏先生によって馬淵氏らの基準図そのものにメスが入ることになりました。

それはまず馬淵氏らの基準図にある直線 D の領域、つまり馬淵氏らが言う「朝鮮半島産鉛」についての分析でした。この直線 D は、発表当初は「朝鮮半島系青銅器の鉛」とされていたものですが、いつのまにか「朝鮮半島産鉛」と変わったものです。

そもそもこの直線 D は、細形銅剣・多鈕細文鏡・菱環鈕式銅鐸が分布することから得られたもので、細形銅剣と多鈕細文鏡、銅鐸の起源とされる馬鐸が朝鮮半島を中心に分布する

とから、朝鮮半島産鉛としてしまうのは、これまでの考古学的知見からすれば無理からぬところもあります。

ところが新井先生によれば、馬淵氏自身が発表した朝鮮半島の鉛鉱山の分布図も佐々木氏が発表した鉛鉱山分布図のどちらもが直線 D とはまったく異なった分布を示すということです。つまり馬淵氏自身の発表にもあるように、直線 D は朝鮮半島産の鉛の分布を示すものではないということになります。ではどこの鉛かと言えば、新井先生によれば中国の商周期の青銅器に直線 D に乗る例が多く、中でも近年注目を集めている三青堆遺跡に近い雲南省の鉱山の鉛も直線 D によく乗っているとのこと。このことから弥生時代前期の各種の青銅器は、商周時代の中国の青銅器のリサイクル品が混入した考えられるとしています。

次に華北の鉛とされる領域 A では、馬淵氏の調査でも中国側の調査でも、今のところこの領域に入る中国の鉱山は見つかっていないということです。ただし中国においては、北部と南部では鉛同位体比に著しい差があり、その点から言えば領域 A を北部の鉛としても問題がないということです。

舶載三角縁神獣鏡が入るとされる問題の領域 B ですが、湖南省などの鉛はこの領域下半部に分布しますが、上半部にはまったく事例がありません。そしてこの領域は、舶載の三角縁神獣鏡だけでなく、仿製の三角縁神獣鏡、古墳時代の仿製鏡が集中しているところ。この上半部には、分析精度は低いですが遼寧省や河北省の鉱山で当てはまるものはあるようですが、それでは華南の鉛とはなりません。

何よりも精度の高いデータとして、朝鮮半島の全州鉱山や月岳鉱山、日本の神岡鉱山がこの分布に一致していることです。

つまり舶載と仿製の三角縁神獣鏡のどちらもが中国のごくごく一部を除く、朝鮮半島もしくは日本の鉛を使用して作られたこととなります。魏鏡ではないということになります。次に小林行雄が三角縁神獣鏡を魏鏡とした主要な根拠である紀年鏡についての分析です。まず馬淵氏らが発表した鉛同位体比のデータから鉛 204、鉛 206、鉛 207、鉛 208 のパーセントとして計算し直し、各成分の差を相対値として、その絶対値を平均したものと類似指数として定義します。それで2面の鏡の分析値を先の式に当てはめ、2面の鏡の類似指数を見るというものです。この類似指数が0に近ければ、同一原料を使用したということになります。

それで紀年鏡を見てみますと、

#### A グループ

正始元年森尾鏡

景初四年辰馬鏡

青龍三年大田鏡

青龍三年個人蔵鏡

## B グループ

正始元年柴崎鏡

景初四年広峯鏡

となることがわかりました。Aグループは、正始・景初・青龍という異なった年号の鏡が同一材料で、同じ時に同じ場所で作られたこととなります。また B グループでも正始・景初が同じ材料、同じ時に作られたこととなります。A と B は別々に作られたこととなります。

異なった年号鏡が中国の王朝下で一括して作られることは考えられず、中国以外の地で作られたこととなります。また異なる年号鏡が一度に作られるということは、刻まれた年号以降に作られたことを示しており、そこには複製鏡、わかりやすく言えばコピー鏡の製作が行われていたことを示しています。さらには復古鏡、リバイバル鏡が作られていた可能性も示しています。

この紀年鏡の分析からも、三角縁神獣鏡が魏鏡ではないことがより鮮明になります。これらの解析結果から、三角縁神獣鏡は魏の鏡ではなく、列島内で作られた鏡であるということになります。

また古墳時代に出土する後漢式鏡類（漢鏡6期）の大部分がその時代のものではなく、新たに作られた複製（コピー）鏡や復古（リバイバル）鏡であることが明らかになりました。例えば、この点にいち早く気づき、小林の伝世鏡論を理論的に批判した内藤晃の指摘が数十年を経て、自然科学によって再度証明されたこととなります。

三角縁神獣鏡が魏の鏡ではないということは、邪馬台国論争において大和説はその支柱を失ったこととなります。

実は問題はこれだけにとどまりません。このブログでも何度か書きましたように、戦後に出来上がった、古墳時代の年代観や枠組みは、三角縁神獣鏡が魏から下賜された鏡というのが大前提になっているからです。その前提自身が間違っているとすれば、その上に建てられた枠組みはどうなるのでしょうか？

ことの重大さにどれだけの考古学研究者が気付いているのでしょうか？

今後の三角縁神獣鏡に関する研究では、魏鏡説を唱えるなら、新井論文を踏まえて、少なくとも鉛同位体比についての独自の解析結果を提示する必要があります。

今回の新井先生の著書が出たことによって、三角縁神獣鏡を中心とする鏡の問題がまったく新しい段階に入ったことを実感します。まさに「戦後レジェームからの脱却」です。

より多くの方にこの著作を読んでもらいたいです。

そして尊敬する新井宏先生に御礼申し上げたいと思います。